

児童がコンテンツを作り、 評価・選定・記録・保管・流通や活用する ～学びの中で撮影、記録、著作権、プライバシーを考え 問題の解決に使う～

熊崎 康文、松井 徹、加藤 真由美、櫛 彩見、林 知代 (岐阜女子大学)
新田 直 (元大藪小学校)

児童が調べた結果を記録・保管し、協働学習などで他の資料と比較検討し問題の解決に使ったり、学校間の協働学習などで資料の保管・流通、さらに、自分の記録として保管したりするなど多様な活用がなされた。

1 児童がコンテンツ作成の活動

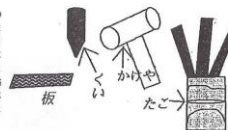
たとえば、1998年には、すでにテレビ会議システムやインターネットを使い、北海道、(寒冷地)、新潟県(海)、岐阜県(輪中)、宮崎県(山間地)のそれぞれ特色のある地域の小学校4校での協働学習がなされた。

ここでは、地域の資料、生活、自然、産業等の撮影記録をし、相手の学校に送り、保管活用がなされた。たとえば、地域の水産研究所や市場で許可を得て、魚や施設をデジタルカメラで撮影し、話をメモし、映像やワープロを使ったり、ときには、絵や手書きでコンテンツを作成し、保存し、他校からの質問に回答を送ったりしていた。この一連の活動は、デジタルアーカイブの地域資料を撮影しデジタルコンテンツを作成する活動と同じである。

最近では、情報端末等の機能も向上し、撮影、音声記録、さらに説明文の入力等が簡単化し、デジタルコンテンツの作成が小学校の低学年でも可能になってきた。また、これらを使い、記録の保管・流通・活用が可能になりだした。

水防そうこのやくめ

水防そうこの中は、くい、かけや(木のハンマー)、ひらべたい板、たごがありました。昭和51年9月12日午前10時28分までいばらが切れ、水防そうこの中にある、ひらべたい板を切り取りにまじこんで、輪之内町の人たちがたくきんで輪之内町に泥水がこえないようにしました。水防そうこは、ていばらがきれ水がこえないようにする道具を入れておく小箱なのです。



さつまぎし(産摩義士)

さつまぎしは、今の観覧船から川の工事をしに岐阜県に来た人たちのこと。それも、工事を自分達ではらえとめいれいされて工事もぜんぜん進まないから、自分の腹を切って死んでしまった人もたくさんいるそうです。狂言(こうおう)昔にもらる人の話があります。ついに責任者の平田ゆきえさんも回答されてしまいました。



あらいぜき

あらいぜきというのは、長良川から大でれ川へ流れ込む水の勢いを弱めるためのものです。それは土ではなく、じゃかごというあまの甲に石をいっぴいづつこんで作りました。さつまぎしの人たちがやった工事の中でも2番目に大変な工事です。幕府の人たちのいやがらせにたえた命がけの工事でした。



低地の人々のくらし (岐阜県・大藪小学校)

2 記録・保管・流通・活用の技術と社会のルール、権利等の学びの必要性

しかし、この記録・保管・流通・活用には、その方法の技術とともに社会のルール、情報倫理、権利(著作権、プライバシー、所有権等)についての学びが必要である。

ところが、撮影等は1年生でも情報端末を用いて簡単にできても、権利、社会のルール（法・倫理も含め）を学ぶことは小学校低学年には困難である。このため、いろいろな工夫がされている。たとえば、撮影されて自分が「いやなこと」は他の人にしない、などの体験を通じての学び・指導がされている。（プライバシー等の基礎学習）



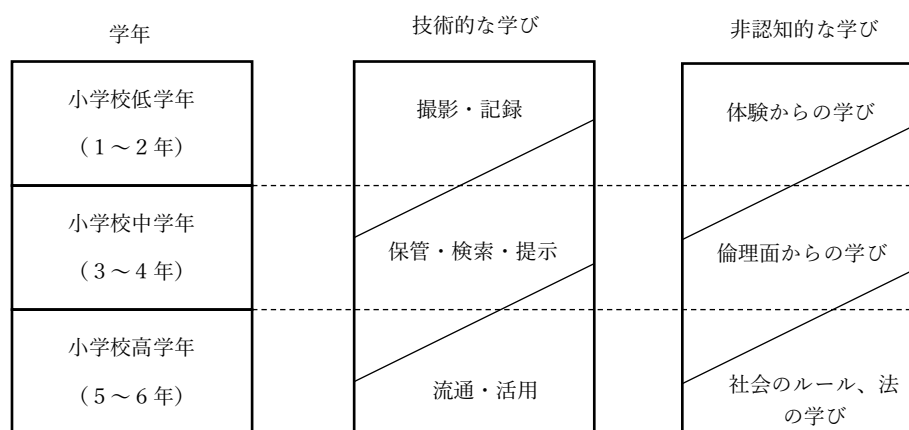
魚市場の取材見学

また、4年生の学校間の共同学習では、他校からの質問に対しての回答を作るために撮影のときは「〇〇を写して、他の△△小学校に送ってもよろしいですか」との許可を得る指導もされていた。（利用する目的も含めて許可を得て活動していた。）

GIGA スクール構想が進みだし、今後、児童の資料収集・記録・保管・流通・活用が多くなり、また、この情報社会での生活の基本はルール、倫理の1つとして、デジタル技術とともに、これらの社会のルール、倫理等の概念と活動をいかに学ばせるか、発達段階に対応したカリキュラムの開発が必要である。

3 技術の習得と体験、倫理、社会のルール（法）のカリキュラム

小学校でのこれらの技術の習得と権利等の理解・活用は、これまでの経験からおおよそ図のようなカリキュラムの構成を考えるべきである。



小学校低学年では、たとえば、自分の書いたものを勝手に使われるといやである。そこで、他の人が書いたものを使いたいときは、

「“〇〇さん、あなたの△△を使ってもよいですか”とお願いし“使ってもよいですよ”と返事がされたら使うようにしよう！」

などの指導が必要である。……自分に「いやなこと」は「他の人もいやである」との認識をもたせることを一つの出発点としたい。

また、技術も権利についても、その学びが学年で完全に分かれるものではなく、図のように相互に関係しながら、児童の発達に応じたカリキュラムをいかに開発するかが課題である。